



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第 34 号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭
者慰霊団体協議会

〒102-0073 千代田区九段北3-1-1
靖国神社遊就館内・地階

電 話 03 (6380) 8943
F A X 03 (6380) 8952

<http://homepage2.nifty.com/ireikyuu>

振替口座 00140-6-334930

編集人 飯 田 正 能
発行人 岩 田 司 朗
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目 次

平成27年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」の御案内	1
東部ニューギニア（現バブアニューギニア国）の戦いと慰霊	2
西部ニューギニア・ビアク島の戦いと慰霊	2
「神武東征と交響曲『海道東征』の復活」 —奉祝「建国記念の日」に—	12
平成27年靖国神社遊就館特別展 大東亜戦争七十年展 最終章 —今を生きるすべての人へ—	1414
事務局からの報告等	16
協議会参加各団体の 平成27年度慰霊行事予定	16

平成27年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」の御案内

平成27年は、大東亜戦争終戦70年という節目の年であります。また、当協議会創立10周年という記念すべき年でもあります。

この意義深い年に当たりまして、当協議会は、参加諸団体と共に、平成27年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を厳粛かつ盛大に執り行い、戦没者の御霊に対し、慰霊顕彰の誠を捧げたいと計画しております。

合同慰霊祭の概要は、下欄に掲記のとおりです。

式典及び昇殿参拝は、従来どおり、靖国神社拝殿及び御本殿において執り行います。

式典後の直会は、趣を変えて、ホテルグランドパレスにおいて実施致します。皆様には、例年にも増して和やか

な雰囲気の下、戦没者の慰霊顕彰に関する意見交換を頂きながら寛いでいただけるものと存じます。

なお、直会会場では、講師師五代目一龍齋貞花師匠の出演を予定しております。同師匠が自ら記録をたどり、まとめられた「東京裁判」秘話を口演していただく予定です。

この記念すべき年に当たり多くの方々の御参加を期待しておりますので、皆様お誘い合わせの上、できる限り大勢御参加下さるようお願い致します。

当日は、靖国神社から直会会場のホテルグランドパレスまで、送迎用バスを御用意いたします。（ホテルグランドパレスの案内図は14頁に掲載。）

平成27年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」の概要

一日 時 平成27年7月4日（土） 12時（参集殿集合11時40分）
二 場 所 靖国神社及びホテルグランドパレス
三 次 第

① 式典・昇殿参拝 12時
② 直 会 13時30分
（靖国神社からホテルグランドパレスまで送迎用バスを用意します。）
四 参加費

① 式典・昇殿参拝（玉串料） 2000円
② 直 会 5000円

会員の皆様には、本誌同封の払込取扱票による参加費御納入をもって御参加申込みに変更させていただきます。

会員以外の方は、当協議会事務局までお問い合わせください。
〒102-0073 千代田区九段北3-1-1

靖国神社遊就館内・地階
（公益財団法人）大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会事務局

電 話 03-6380-8943
F A X 03-6380-8952
Eメール bck05197@nifty.com

東部ニューギニア(現パプアニューギニア)の戦いと慰霊

専務理事 圓藤 春喜

一 はじめに

昨年7月に安倍首相がオセアニア地区を訪問した際のオーストラリア議会での演説が「日豪間の戦争に踏み込みながら、相手に気持ちを寄せて尊厳を示し、和解の土壌を作った」として評価されている。

その後訪問したパプアニューギニアでは、首都ポートモレスビーでの首脳会談の後、ウエワクにある国立「ニューギニア戦没者の碑」(昭和56年建立)を参拝され、8月15日の「全国戦没者追悼式」でも触れられたことからニューギニアの戦いが話題となった。今回は、「ジャワの極楽、ビルマの地獄、生きて帰れぬニューギニア」と言われた東部ニューギニアの戦いと慰霊について紹介したい。

二 ニューギニアの地理

ニューギニア島は、日本の約2倍の面積を持ち、東西2000km、南北800kmの大きさで、亀あるいは鰐の形をした島である。

気候は、熱帯雨林気候で高温多湿であり、全島ジャングルに覆われた悪疫

瘴癘の地と言われていた。

中央に険しい脊梁山脈があり、東からオーエンスタンレー(最高部は4000m級)、ビスマルク(同4500m級)、マオケ(同4800m級)の山脈が連なっている。

河川は、急流河川が多く水量も豊富のため、部隊の渡渉を制限するところが多い。

道路は貧弱で、自動車道、橋梁はほとんど整備されていなかった。

島内には処々に開拓用の小規模飛行場があり、軍用への転用が可能であった。

交通は主として空路と海路を利用して行われていた。

政治的には、東経141度で二分され、東半分はオーストラリアの統治領、西半分はオランダの植民地(インドネシア領)であった。

人口密度は希薄で、全人口は300〜400万人程度と推定されていた。

住民はパプア系諸民族で、部族社会を構成しており、純朴で協力的であった。

三 東部ニューギニアの戦い

1 全般

南方資源地帯を占領した日本軍は、米豪の連絡線を遮断するとともに、反抗拠点を覆滅するため、ポートモレスビーの占領(MO作戦)とサモア・フィ

ジー・ニューカレドニアの占領(SF作戦)を企図し、ソロモン諸島、東部ニューギニア北岸等に航空基盤設定のための飛行場を建設しつつあった。

ポートモレスビー攻略は、当初空母機動部隊の援護下に海路から直接攻略する予定であったが、珊瑚海海戦で多くの航空戦力を喪失したため、急遽陸路から攻略することに変更された。

一方、ミッドウエー海戦に勝利した米豪軍は、マツカーサーの陸軍がニューギニア・フィリピンを経由して、海軍がマーシャル諸島・マリアナ

諸島を経由して日本本土に至る反攻計画に基づき、着々と準備を整えつつあった。

2 南海支隊のポートモレスビー攻略

作戦と防勢転移

陸路から「ポートモレスビー占領」の任務を与えられた第17軍(ニューギニアとソロモンの両作戦を担当)隷下の南海支隊(堀井富太郎少将指揮の高

知・歩兵第144聯隊及び福山・歩兵第41聯隊基幹、兵員約1万5000名)は、昭和17年7月21日にブナ地区に上陸、ポートモレスビーに向け進撃を開始した。

支隊は、オーエンスタンレー山脈の難路を切り開き、豪軍の抵抗を排除しながら進撃し、9月24日には分水嶺を

越え、16日にはポートモレスビーの街の灯が見えるイオリバイワ(直距離50km)付近を占領した。

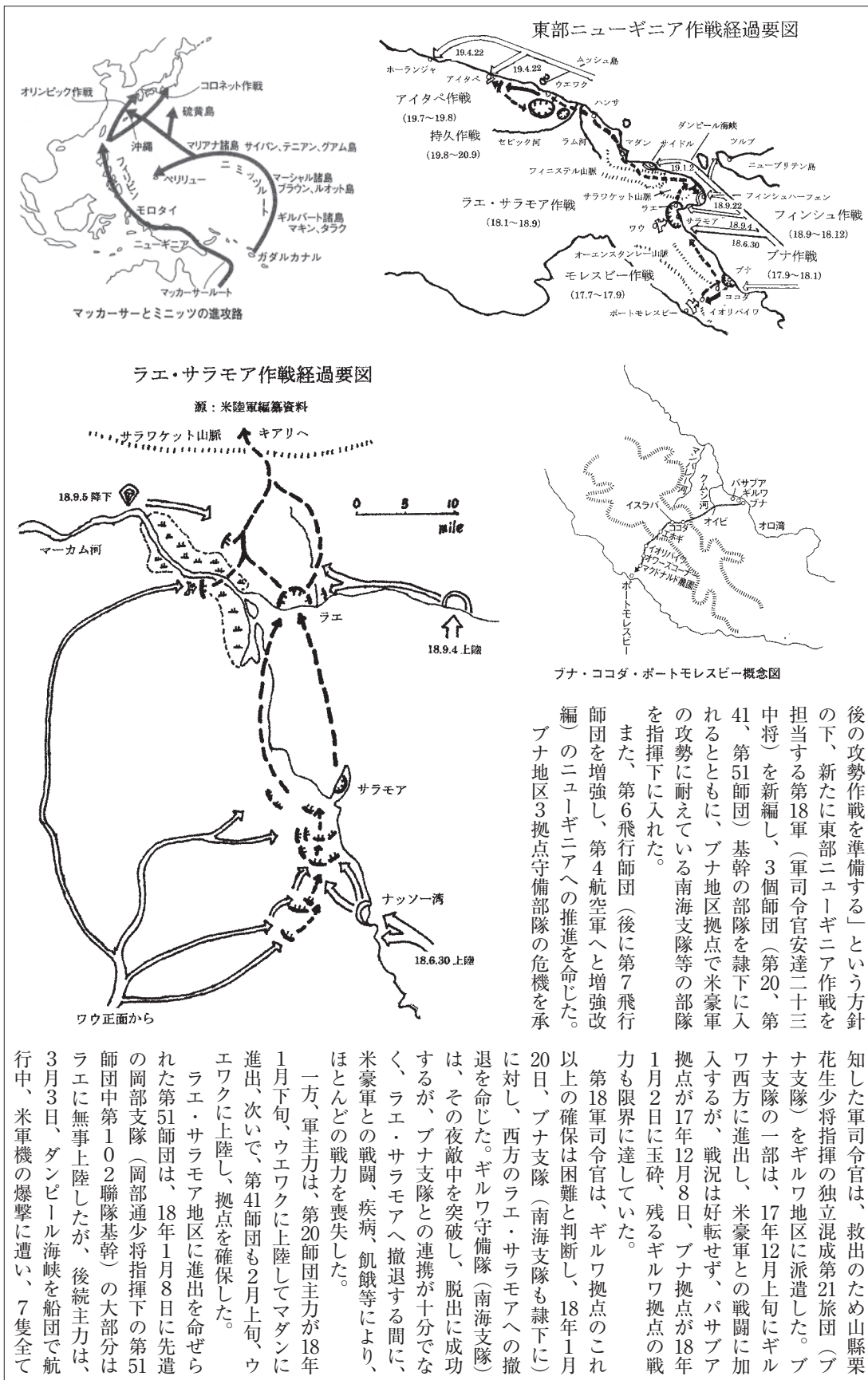
昭和17年6月5日のミッドウエー海戦での大敗、8月7日のガダルカナル島(以下「ガ島」という。)への米軍上陸で、ニューギニア正面の作戦を抑制せざるを得なくなった第17軍は、南海支隊に対し、「防勢に転移しオーエンスタンレー山脈の攻勢拠点とブナ拠点の確保」を命じた。

南海支隊は9月16日防勢に転移し、補給途絶の状況下で、山地拠点の確保に努力するが、豪軍の追撃は急で、更に米軍がブナ地区東方に上陸し、退路を断たれる状況になったため、これまで進撃してきた難路を逆進し、ブナ地区に後退した。この後退間に、豪軍との戦闘、疫病、飢餓、河川渡河時の溺死等かなりの戦力を喪失した。

ブナ地区では、南海支隊の残存部隊と急遽増援された部隊等でバサバ、ブナ、ギルワの3拠点の確保に努めるが、米豪軍の攻勢で、17年11月頃にはどの拠点の戦力も限界を迎えつつあった。

3 第18軍の新編と東部ニューギニアへの進出

このような状況下、大本営は、17年11月9日に「ラエ・サラモア付近以西の要域を絶対国防圏として確保し、爾



の輸送船が撃沈(ダンピールの悲劇で知られる)され、約3600名の人員(師団の3分の1強)とほとんどの装備品を失った。

師団は、残存部隊をラバウルで再編した後、ニューブリテン島から小型舟艇・駆逐艦のピストン輸送で4月中旬に逐次ラエ・サラモア地区に進出した。

4 ラエ・サラモア地区の戦闘

ブナ地区を占領した米豪軍は、豪軍の空輸部隊をもってオーエンスタンレー山脈のワウ地区から北進させ、18年1月頃にはサラモア正面に脅威を及ぼすようになりつつあった。

ラエ・サラモア地区の防衛を命じられた第51師団は、当初、岡部支隊をもつてワウ方面から北進してくる豪軍の各個撃破を追求し、18年1月27日からワウ飛行場に対し攻撃を開始するが、空輸で急速に増強される敵の抵抗に阻まれた上、2月上旬には食料も尽き、やむなくラエ・サラモア地区での防勢に転移した。

一方米豪軍は、ワウ正面の攻撃に連携して、6月30日にサラモア南方に上陸し、9月4～5日にはラエ北方と西方に上陸した。

第51師団の退路が遮断される危機を把握した第18軍司令官は、9月6日、師団に対し、サラワケット山脈(最高

部4000m級)越えてマダンに撤退することを命じた。

第51師団は、9月12～15日、敵の包囲を脱してサラワケット山中に入り、10月9日～月末にかけて逐次北岸のキアリに到着した。

10月中～下旬の山中は、気温が氷点下になることもあり、後退中に飢餓、疾病、凍死、転落等により多くの将兵を喪った。

5 フィンシュハーフェン(以下フィンシュと呼称する)地区の戦闘

ダンピール海峡を制するフィンシュ地区の重要性に着目した第18軍司令官は、マダン～ラエ道を建設中の第20師団に対し、フィンシュ地区の確保を命じるとともに第41師団のマダンへの推進を命じた。

第20師団は、歩兵第80聯隊を先遣するとともに、主力も北岸沿いに急行した。

9月22日に、米豪軍(豪第9師団)部隊がフィンシュ北方のアント岬に上陸し、守備部隊に対し攻撃を開始した。師団主力は、先頭部隊が10月11日にフィンシュ地区に進出、16日から攻撃を開始し、後続部隊も逐次戦闘に加入させ、約2ヵ月にわたって数次の攻撃を続行するが、急速に増強される敵に阻まれて攻撃は進展せず、12月19日には戦力が限界に達したため、「攻勢の中止、ウエワクへの撤退」を命じられた。

6 2個師団基幹のウエワクへの撤退

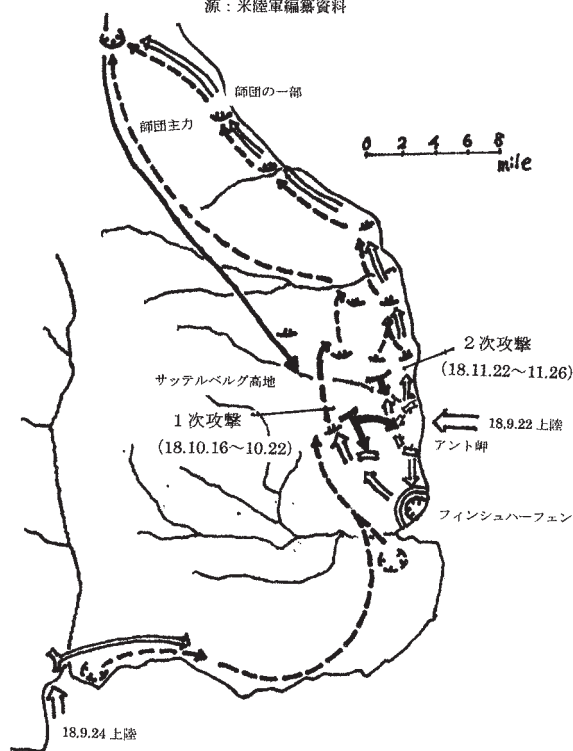
ラエ・サラモア地区からサラワケット越えて撤退した第51師団基幹の部隊は、10月末に北岸のキリアに集結、フィンシュ地区で攻勢中の第20師団の後方警備に任じていたが、19年1月2日に米軍がキアリとマダンの中間にあるサイドル岬に上陸、2個師団が退路を遮断された。

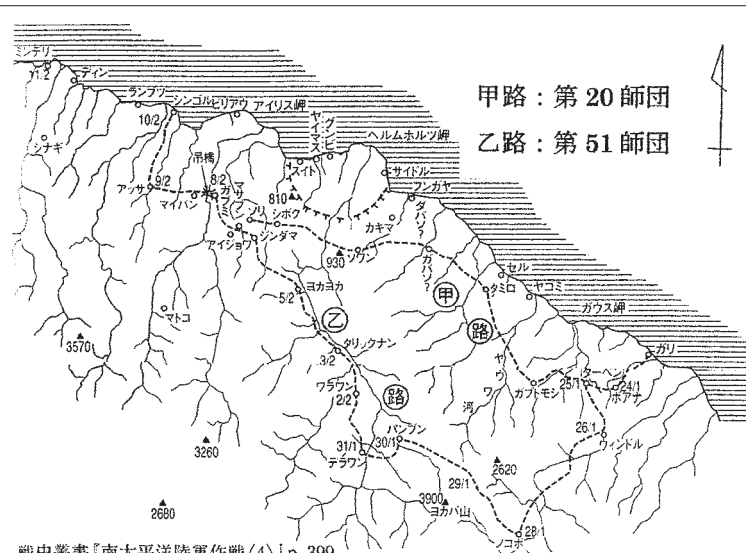
軍主力壊滅の危機に直面した軍司令官は、両師団に対し、「敵上陸部隊を迂回し、フィニステル山脈を縦断してマダンに撤退」(ガリ転進)することを命じた。

第51師団は19年1月23日に、第20師団は1月25日にガリから西方への転進を開始、フィニステル山脈の険峻な難路を2縦隊で前進し、2月10～20日頃北岸に到達、2月中旬～月末にかけて

フィンシュ作戦経過要図

源：米陸軍編纂資料





戦史叢書『南太平洋陸軍作戦(4)』p. 399

マダンに集結した。

次の米豪軍の上陸地をハンサ地区と見積もった軍司令官は、3月上旬、第41師団の一部をマダン地区に、主力をハンサ地区に、第20師団をブーッ地区に、第51師団をウエワク地区にそれぞれ推進し、次いで、第20、第41の2個師団をホーランジャに、第51師団をウ

エワクにそれぞれ推進する予定であった。

軍主力の新態勢への移行間の4月2日、米軍がウエワク西方150kmのアイタペと、同350kmのホーランジャに上陸を開始した。この情報に接した軍司令官は、軍主力3個師団のウエワクへの推進を命じた。

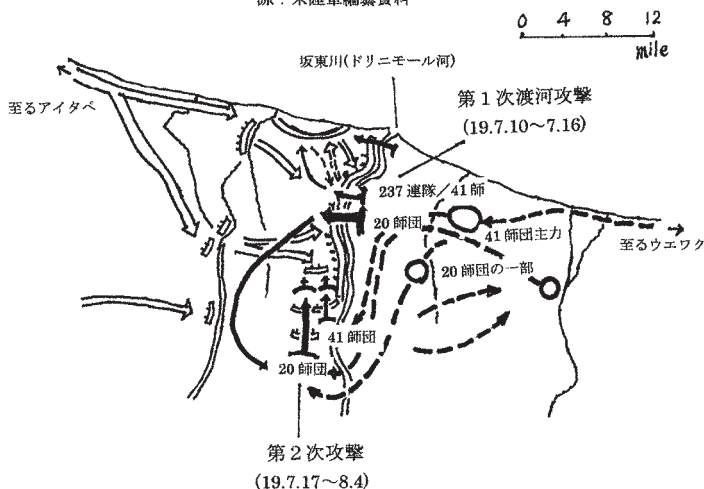
軍主力の移動は、ラム・セビック河口の大湿地帯の通過に難渋を極めた(将兵は数日間泥中で直立したまま飯眠を取らざるを得なかったとのこと)が、19年3月6月にかけて3個師団主力が逐次ウエワク周辺に集結した。

この移動間に戦闘、砲撃、疾病、飢餓、山地での転落、ラム・セビック河口の大湿地帯通過時の溺死等で多くの将兵を喪い、ウエワクに集結できた兵力は、約5万4000名に過ぎなかった。

7 アイタペ決戦とウエワクでの持久
19年4月22日の米豪

アイタペ作戦経過要図

源：米陸軍編纂資料



軍のアイタペ・ホーランジャへの上陸を承知した大本営と南方軍は、第18軍による爾後の攻勢は困難と判断し、6月20日には軍を南方軍直轄とした上で、ウエワク地区での持久を命じた。この命令に接した第18軍司令官は、「ウエワクに蟠踞する案は、敵が進んで我を相手としなければ、軍は単に孤島に徒食して遊兵化し、国軍の健闘にこたえることはできない」(第18軍作

戦記録)と判断し、「アイタペに上陸した敵を攻撃し、できるだけ多くの敵を牽制し、爾後の作戦に寄与する」に決し、第20師団と第41師団を並列して19年7月上旬〜8月初頭に掛けてアイタペ地区で乾坤一擲の決戦を挑んだ。一時は米豪軍を後退させるが、米軍の迅速な増強による反撃、著しい戦力の消耗、食料・弾薬の払底のため、8月4日には攻撃を中止し、ウエワク拠点での持久に移行した。

このアイタペ作戦で、2個師団半の米豪軍を3カ月にわたり拘束し、比島作戦を遅延させた効果は絶大なものがあつたが、この時間を比島決戦準備にうまく生かすことができなかったのが残念に思われる。

爾後、終戦までの1年余、執拗に掃討を企図する豪軍とこの周辺で戦いを継続しつつ自活し、終戦により9月13日、豪軍に降伏し、3年余の戦いを終えた。

因みに第18軍は、20年8月10日には大本営宛てに訣別電報を打電し、

東部ニューギニアの戦いにおける損耗等

区分	人員
作戦参加兵力	約 150,000 人
転属・後送者	約 12,000 人
戦死・戦傷病死者	127,600 人
収容所への収容者	11,731 人
日本への復員者	10,072 人

資料源：復員省・厚労省資料

その日に備えていたとのことである。

8 住民の協力

第18軍の長期にわたる奮戦の陰には、自らの食を減じてまでこれを日本軍に供給するとともに、道案内、補給物資の搬送等、部隊の行動になくてはならない役割を果たしてくれた。

特に、最後のウエワクでの持久戦では、軍司令官とカラオ大酋長との約束に基づき、軍の自活のために協力を惜しまなかったとのことである。

9 東部ニューギニアの戦いにおける損耗等

東部ニューギニアの戦いにおける日本軍の損耗は次表のとおりである。

日本軍の損耗の内、6／7割が戦傷病死、餓死であったと言われている。

10 降伏後の行動

降伏後は、ウエワク沖のムッシュ島に1万1731名が収容され、20年11月末／21年1月末の間に1万72名が日本に復員した。

収容間に病気や栄養失調で1659名の方々が故国の土を踏まずに無念の死を遂げている。

安達軍司令官は、当初ムッシュ島に収容されていたが、22年1月にラバウルの戦犯容疑者収容所に移動し、裁判に臨まれた。

裁判間、「すべての責任は指揮官たる自分にある」と主張し、部下を弁護し続けたとのことである。

軍司令官は、全ての裁判が終わった22年9月10日に自決されたが、その遺書には、「・・・小官は 皇国興廢の関頭に立ちて（中略）人として堪える限度を遥かに超越せる克難敢闘を要求致し候、之に對し黙然之を遂行し力竭きて花吹雪の如く散り行く若き將兵を眺むる時、君国の為とは申しながら、其断腸の思は唯神のみぞ知ると存候、当時小官の心中堅く誓ひし処は、必之等若き將兵と運命を共にし南海の土となるべく縦令凱陣の場合と雖、渝らじとのことに有之候・・・」と認め

東部ニューギニアの遺骨収容の状況

区分	人員
戦死者	127,600 人
収容遺骨	50,780 柱 (約 40%)
未収容遺骨	76,820 柱 (約 60%)

資料源：厚労省資料

られていた。

この自決について、作家の山田風太郎は、著書『人間臨終図鑑』において

「・・・（終戦から）2年を経たものの責任を全うしたと見極めて

から自決をしたのは見事というべきである・・・」と評している。

四 東部ニューギニアにおける慰霊・顕彰

1 戦没者の遺骨収容

東部ニューギニアにおける遺骨収容は、昭和29年に初めて実施され、その後途絶えていたが、昭和44年から再開され、東部ニューギニア戦友会等で自主的に実施されていた。その後国の支援も受けられるようになり、現在までに年数回継続して実施されている。

パプアニューギニア政府は、初代首相となったソマーレ氏（現ウエワク州知事）を始め非常に協力的であるが、

現在までに収容帰還した御遺骨は、次表のとおりである。

全戦没者12万7600名の内、5万780柱（約40％）に過ぎず、7万6820柱（約60％）の御遺骨が未だ現地に残されたままである。

また、現在までの遺骨収容は、ホテルを拠点にして車で行ける範囲でしか実施できておらず、道路から離れたジャングル内やオーエンスタンレー・サラワケット・フィニステル山脈のような山岳地帯はほとんど手付かずの状況である。

2 戦没者の慰霊

東部ニューギニアには、戦友会等の建立した慰霊碑が36基確認されているが、その内29基が住民等により良好な状態に維持されている（厚生労働省資料）。

政府は、昭和56年9月16日に東部ニューギニア地域及びその周辺海域で戦没された12万7600名の方々の慰霊するため、パプアニューギニア政府の協力を得て、第18軍の最後の決戦が行われ、終戦を迎えた地ウエワクに国立慰霊碑を建立し、補給途絶の中で3年余にわたり善戦敢闘した將兵を慰霊・顕彰している。

慰霊碑周辺は、公園として整備され、維持管理はパプアニューギニア政



ブナ地区戦没者慰霊碑 (日本政府建立)



ココダの南海支隊慰霊碑



ウエワク・洋展台慰霊碑 (西垣匡建立)



日本政府建立「ニューギニア戦没者の碑」

府観光促進庁に委託して良好な状態に維持されている。

昨年7月中旬の安倍総理のパプアニューギニア公式訪問では、首都ポートモレスビーでの首脳会談の後、ウエワクに移動して、この慰霊碑を参拝され、慰霊の誠を尽くされた。

総理の外国公式訪問日程に当初から

慰霊碑参拝が組み込まれたのは戦後初めてのことである。



ニューギニア戦没者の碑に献花する
安倍総理と昭恵夫人

また、総理の慰霊碑参拝に際しては、東部ニューギニア戦友遺族会の堀江正夫会長、日本遺族会の尾辻秀久会長等が先行し、総理の出迎え・案内を実施された。

ウエワクの住民は、ソマレー州知事(初代首相)の御配慮もあり、学校も休校にして、住民総出で総理の来訪を歓迎し、安倍総理をして「外国を訪問してここまで歓迎されたのは初めて」と言わしめるほどの親日度を示してくれたとのことである。

五 おわりに

制海・制空権なく、補給も途絶し、人間の堪え得る限界を遥かに超えた困難な状況下で、3年余にわたり一糸乱



ウエワクで歓迎を受ける安倍総理

れず戦い続け、マッカーサー軍の反攻を19年9月まで抑止し続けた第18軍の東部ニューギニアでの戦いは、もっと高く評価されるべきであると思う。

昨年の安倍総理のウエワク慰霊碑参拝に続き、戦後70年の記念すべき今年には、天皇、皇后両陛下のバラオ共和国慰霊御訪問が実現する運びとなっており、「戦没者遺骨収集の推進に関する法律」も施行される。

戦後70年の記念すべき年が、国民が戦没者に一層の思いを寄せる年となることを期待し、筆を置くこととする。

西部ニューギニア・ビアク島の戦いと慰霊

常務理事兼事務局長

岩田 司朗

一 はじめに

昭和19年6月中旬から8月中旬にかけて生じたマリアナ諸島の戦い(サイパン、グアム、テナアン)は、絶対国防圏の攻防を巡る戦いであったが、この戦闘に先駆け、豪北方面、西部ニューギニア戦線において、特に日本軍にとっては、その後の戦勢に極めて大きな影響を及ぼす激烈な戦闘が展開された。

絶対国防圏の南東翼を死守し、その作戦・戦闘の成果を拡大して、連合軍の艦隊主力をカロリン諸島方面に誘引しこれを一気に撃滅して、該方面の海空戦力比の好転を図ろうとしたものである。

二 ビアク島の地形概観

ビアク島は、ニューギニア北西部へルビンク湾内最大の島であり、東西約90km、南北約40km、南緯1度の赤道直下に位置し、全島が熱帯雨林に覆われている。土質は石灰岩質で、広く平坦な飛行場適地を有し、日本軍からみれば、フィリピンから東部ニューギニアの最前線へ至る飛行経路上の、また、米軍側からみれば、パラオとフィリピン南部とを爆撃圏に収める要衝に位置している。

三 昭和18年9月から19年4月頃 の情勢

南東太平洋方面においては、昭和18年2月、ガダルカナル撤収作戦以来、マッカーサーの反抗作戦は、予想以上にその規模が大きく、かつ、速度も速かった。第8方面軍、特に東部ニューギニア第18軍は苦戦を重ね、増援兵力を逐次投入し、消耗戦を繰り返さざるを得ない状況であった。

このような戦況下にあつて、策定された大本営の新作戦方針は、「中南部太平洋においては、南東方面の現占領要域において来攻する敵を撃破しつつ極力持久を策し、この間、速やかにバングラ海よりカロリン群島方面に防備を整備し、もって来攻する敵に対し徹底的に攻撃を加え、つとめて事前にその反撃企図を破砕する。」というものであった。

昭和18年9月、ビアク島を含む豪北方面(インドネシア東部)を絶対国防圏の一角に指定し、この地域の守備に第2方面軍(司令官・阿南惟幾中将)及び第2軍(司令官・豊島房太郎中将)をあてた。

西部ニューギニアへは12月に第36師団(師団長・田上八郎中将)が進出し、

うちビアク島には、歩兵第222聯隊を基幹とするビアク支隊(支隊長・葛目直幸大佐)が分派された。ビアク支隊は、海岸線の後方に東西二つの巨大な鍾乳洞を発見し、西洞窟に司令部を置いた。

日本軍は、この後更に北支から第35師団(師団長・池田俊吉中将)をビアク島へ転用し、ビアク支隊はニューギニア本島へ合流させる計画であった。しかし、19年4月、第35師団の輸送は、連合軍の潜水艦攻撃を受けて手痛い打撃を被り、ビアク島へは到達できなかった。

アメリカ軍の上陸までに日本軍がビアク島に配備できた兵力は、陸軍1万4000名、海軍1947名を数えたが、その過半は、飛行場設営隊や海上輸送隊、開拓勤務隊など後方勤務部隊が占め、戦闘部隊は、歩兵第222聯隊を中心に、海軍陸戦隊を加えても、4500名に過ぎなかった。

四 ビアク島を巡る作戦方針

軍司令官は大本営において、「昭和19年中期から末期にかけて、所望の飛行機の充実が期待される情勢にあるので、国軍はこの戦力を西部ニューギニア方面に活用する方針である。」

第2軍は昭和19年の中期頃までに、できるだけ飛行場を整備すること。

そして、それが完備した暁には、概ね2個師団内外の飛行部隊を軍方面に協力せしむる予定である。どうか航空軍になったつもりで努力されたい。」旨を伝えられた。

このような大本営の方針の下、「軍は速やかに作戦準備を整え、来攻する敵を撃破して、「サルミ」付近より以西、太平洋沿岸の要域並びに「スネエーヴ」山脈高地要地を確保し、もって攻勢の機を待つ。

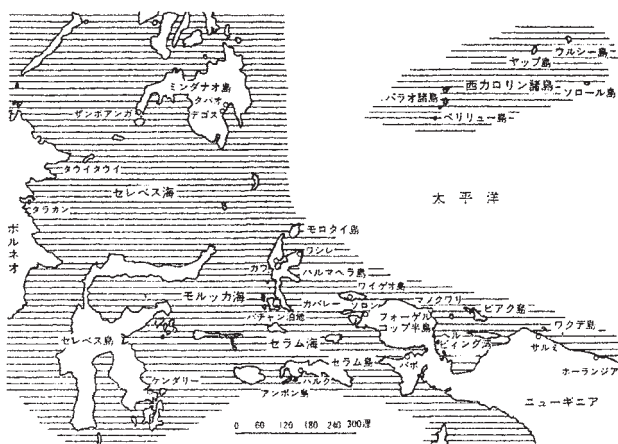
確保すべき要域の陣地戦は、支障点及び拠点をもって編成する。「サルミ」「ビアク」島を大支障点とし、これに各1飛行団分の集団飛行場を編成する。」といった作戦企図を確立し、兵力配置がなされていった。

五 絶対国防圏の修正

昭和19年春、ダグラス・マッカーサー大將率いる南西太平洋方面連合軍は、西部ニューギニアを経てフィリピンへ向かう反攻作戦を推進していた。

マッカーサー軍は、4月22日にニューギニア島北部のホーランジアへ、5月17日にはサルミへ上陸し、次に昭華をビアク島に定めた。6月中旬にチェスター・ニミッツ大將指揮下の部隊のサイパン進攻が予定されており、マッカーサー軍には、それまでにビアク島の飛行場を確保してニミッツ軍を

豪 北 方 面 概 図



戦」構想にのつてビアク島を死守する構想を堅持し、大本営陸軍部も結局、阿南軍司令官の方針を追認することになった。

海軍の作戦は、米軍がビアク島へ進攻してくれば、海上機動第2旅団(旅団長・玉田美郎少将)を増援部隊として送り込む「渾作戦」を実施して決戦場に仕立て上げ、米軍主力を誘引するというものであった。

六 ビアク島の守備兵力

支援できるよう期待がかかっていた。米軍は、占領したホーランジアの飛行場を拠点に、4月28日以降、ビアク島に対して連日の空襲を加えた。日本軍では、ホーランジア失陥により、大本営陸軍部が絶対国防圏をニューギニア島西端のソロンまで引き下げる方針を決定した。しかし、阿南方面軍司令官は、この措置を不満とし、アメリカ太平洋艦隊主力をパラオ近海へ誘い込み、機動部隊と基地航空隊によって撃破するという「あ号作

名、後方部隊約3700名、台湾軍夫とインドネシア兵補約3000名であった。戦闘部隊は歩兵第222聯隊と長谷川高射砲中隊のみであった。それ以外は後方勤務部隊であり、合わせても小銃は1388挺しか装備していなかった。

歩兵第222聯隊は、昭和14年3月弘前で編成され、4月渡支以来北支で連戦して戦績を積み、昭和18年秋、海上機動部隊に改編された聯隊であり、当時の日本軍としては屈指の優良装備

を有していた。編成は、9個歩兵中隊

(うち第5、第9中隊はスンホル島ソロンへ配備)を中心に3個迫撃砲中隊、3個砲兵中隊、1個機関砲中隊、1個戦車中隊、1個工兵中隊等からなり、戦車中隊は95式軽戦車9両を保有していた。長谷川高射砲中隊(野戦高射砲第49大隊第3中隊)は88式野戦高射砲4門を有していた。野戦高射砲第49大隊は、昭和16年に満洲で編成され、昭和19年にニューギニアへ進出、うち長谷川中隊がビアク島へ分派されていた。

海軍は、マノクワリの第18警備隊、ビアクの第19警備隊、サルミの第91警備隊を合わせて5月1日付けで第28特別根拠地隊を編成、司令官に千田貞敏少将を任じ、第4南遣艦隊に編入した。千田少将は5月15日にビアク島に着任したばかりで、司令部は2名のみで、名ばかりの組織であった。

七 戦闘経過

1 ビアク支隊の戦闘

5月27日早朝、連合軍は艦船50隻の機動部隊をもって、爆撃機約40機の援護の下に來攻した。午前7時、約1個師団の兵力を使用して、主力をもってボスネックに、また一部(歩兵1個中隊、戦車約10両)をもってモクメル東方地区に、それぞれ上陸を開始した。更に戦車を伴う有力な部隊が、同日午後3

時頃にはバライ付近にも上陸してきた。

ビアク島には、支隊長葛目直幸大佐統率の下に、相応の部隊が配置されていた。部隊は予め計画するところに基づき、主力は飛行場及びボスネック間に南面し、また、一部はボスネック以北に東面して陣地を占領していた。

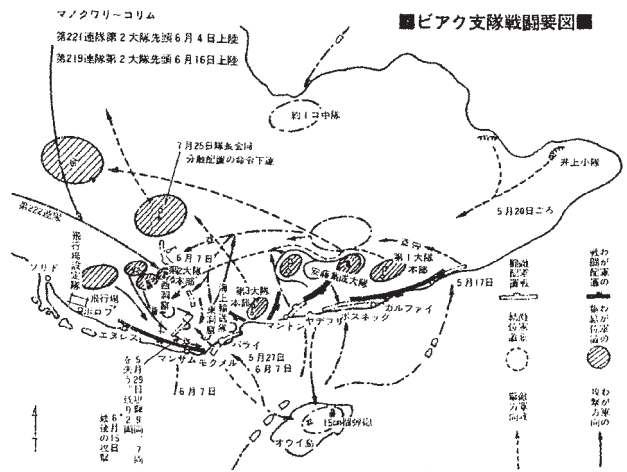
支隊は、敵の上陸の初動において、これを水際に撃退するごとく猛攻を加えた。

同島には、海軍の特別根拠地隊約2000の部隊もいたが、陸軍部隊に協力し、同島に敵の上陸開始後は、終始一体となって本戦闘に参加した。

ビアク島の地形は日本軍に利した。海岸を見下ろす台地には、至る所に頑丈な天然の洞窟があり、将兵を敵の砲爆撃から掩護していた。5月28日、M4中戦車を先頭に前進する米軍第162連隊第2、第3大隊に対し、日本軍は十字砲火を浴びせ、歩兵の肉薄攻撃により戦車3両を破壊した。師団長ホレス・ヒューラー少将は、この戦況に狼狽し、第6軍司令官ウォルター・クルーガー中将へ増援要請を行った。クルーガー中将は直ちに第163歩兵連隊の増派を指示した。

支隊は、海軍部隊と密接に協同しつつ、不利な条件を克服して敢闘を続けた。特に5月30日、支隊の総力を挙げ

■ビアク支隊戦闘要図■



221聯隊第2大隊（小沢大隊）の主力及び第222聯隊第5中隊（ヌンホル島派遣隊）を同島に突入せしむることとした。

この部隊は、3梯団となって逐次ビアク島に進出した。即ち、第1梯団は5月31日にマノクワリを出発、6月2日、ビアク島コリムウエ付近に到達した。以後、6月16日頃までに同地に上陸し、西洞窟付近に前進して、支隊長の指揮下に入った。

更に、在ヌンホル島の歩兵第219聯隊の第2大隊（西原大隊）をも、ビアク島に増援するよう命令した。この大隊は、6月24〜25日頃コリムウエに上陸

2 渾作戦

① 「あ」号作戦計画

次いで6月1日に敢行した夜襲は、ボスネック及びマンドン間の敵を水際に撃攘し、オウイ島に遁走せしめた。連合軍は、6月2日午前7時頃より更に新たな船団をもってボスネックに上陸してきた。かくて戦闘は益々熾烈化した。

これより先、軍はビアク島の兵力増強を企図して、在マノクワリの歩兵第

は甚大な損害を被った。

中部太平洋、南東方面ともに退勢に陥った情勢の中で、消耗した母艦航空兵力の再建をまつて、それぞれ第1機動艦隊と第1航空艦隊に結集し、米艦隊と決戦して、その侵攻を阻止すべく、軍令部が策定したのが「あ」号作戦であった。

② 渾作戦の発動

昭和19年5月28日、南方軍と南西方面艦隊の合同意見として、ビアク島へ増援の地上部隊を逆上陸させる構想が具申された（渾作戦）。

ビアク島を巡る作戦については、陸、海両軍間で意見の相違が見られた。絶対国防圏構想を基に「あ」号作戦を計画済であった海軍、そして陸軍部内でもマリアナ諸島、パラオ諸島、西部ニューギニアのどこに米軍が侵攻してくるか、その対応について意見が分かれていたが、いずれにしても、ビアク島を喪失すればフィリピン南部や東部蘭印が空襲に晒されるだけでなく、パラオ諸島の制空権が揺るぎ、「あ」号作戦の成否に関わるため、5月29日夜、大本営陸軍部も同意し、また、聯合艦隊は、ビアク支隊の善戦を見て渾作戦を発令した。6月2日、海上機動第2旅団を乗せた輸送船団と、左近允直政少将の率いる戦艦「扶桑」

と重巡「妙高」「羽黒」「青葉」を基幹とする「渾部隊」がタバオから出撃した。

ニューギニア方面における連合軍の洋上兵力は、トーマス・C・キンケイド中将率いる第7艦隊（重巡「オーストラリア」、軽巡「ボイシ」フェニックス「基幹」）しかなく、戦力は日本軍の方が優勢であった。しかし、日本軍は、果敢に出撃してきたキンケイド艦隊を空母機動部隊と誤認し、渾部隊はニューギニア・ソロンへと退避してしまった。

左近允少将は快速の駆逐艦による輸送の方が成功の可能性が高いと判断し、渾部隊のうち駆逐艦6隻に海上機動第2旅団将兵の一部を乗せて、6月8日ソロンを出発した。しかし、米軍機の空襲により、駆逐艦「春雨」が沈没、他の艦は午後10時にビアク島近海まで到達したが、キンケイド艦隊と遭遇したため、脱出を余儀なくされた。こうして、第2次作戦も失敗に終わった。

聯合艦隊では、キンケイド艦隊を撃滅しない限り、渾作戦は無理と判断し、6月10日、戦艦「大和」「武蔵」以下の戦力をハルマヘラ島に集結させ、第3次作戦を発令した。しかし、翌11日、米機動部隊がマリアナ諸島へ来襲したとの報が伝わり、ビアク島どころではなくなり、渾作戦は中止となった。

これより先、海上機動第2旅団が、海軍の第5及び第16戦隊その他の艦船の協力の下に、ニューギニアの西北海上を東進しつつあるとの報に接したビアク島支隊の将兵は、一同胸を躍らせて、ビアク島の戦機正に至れりと、万感の思いで期待し、その来援を念願したのである。ところが、この作戦が全中止となったことは、絶大なる期待が落胆となり、1万将兵を心理的に弄んだに過ぎないと言われても仕方のない結果に終わってしまったのは、残念なことである。

3 米軍師団長更迭

渾作戦は失敗したが、ビアク島はニューギニア本島のマノクワリから舟艇で到達できる距離にあり、兵員と糧食、弾薬が細々とではあるが送り続けられた。

米軍の飛行場占領の予定は、大幅に遅れていた。マッカーサー大將は、サイパン上陸を行うニミッツ軍を支援する責任から、面子にかけて第6軍司令官クルーガー中将を督励し、クルー

ガー中将はまた、第41歩兵師団長ヒューラー少将を督励していた。だが、ヒューラー少将は、日本軍の増援の動きを見て、更に1個連隊の増援要請を送った。クルーガー中将は、ホーランジアにあった第24歩兵師団第34連

隊をビアク島へ増派するとともに、ヒューラー少将を弱腰と判断して更迭を決断し、代わって第1軍団長アイケルバーガー中将をビアク島攻略部隊の総指揮官に任命した。

アイケルバーガー中将は、6月15日にビアク島に飛来し、第34歩兵連隊戦闘団も18日にボスネックへ上陸した。アイケルバーガー中将は、部隊配置を一新し、4個連隊の兵力をもって日本軍が籠もる東西の洞窟に対して間断のない猛攻撃を加えた。

(注・アイケルバーガー中将は、ビアク島作戦回顧録で、「米軍の損害を最小限に食い止めるため、1平方メートルにつき数トンの砲爆撃を打ち込んだ。これは、アメリカの納税者の大きな負担であることは百も承知だったが、それを敢行しない限り、ビアク島の占領は不可能であった。」と記述している。)

4 西洞窟陣地の陥落

ビアク支隊の司令部が置かれていた西洞窟は、3層の床を張り、最大時には、2000名を収容していた巨大な鍾乳洞であった。この頃には食料も飲料水も不足し、将兵は僅かばかりの乾パンと鍾乳石から滴り落ちる嫌な味のする地下水で飢えと渴きを凌いでいた。そのため赤痢患者が続出し、洞窟

内は糞尿と死体とから発する悪臭が充満していた。

葛目支隊長は、6月21日に軍旗を奉焼し、一旦は玉碎を決意するが、千田少将らの説得により、戦線後方の高地へ脱出した。ここに至って阿南方面軍司令官は25日、ビアク島への増援中止を決定、ビアク支隊に対して持久戦への転移を発令した。西洞窟は、27日に米軍が制圧し、同日東洞窟の海軍第19警備隊も陣地を撤収して後方へ脱出した。

7月2日、葛目支隊長は遂に、自決の道を選んだ。支隊長代理大森正夫少佐と千田少将以下の将兵は、ビアク島各地のジャングルに分散して自活し、友軍の再来を待つことになった。大森少佐が、分散持久の第2軍命令を海軍通信隊経由で受領したのは、7月中旬のことであった。この時の残存人員は1600余名にまで減少していた。

日本軍将兵は、ジャングル内に食糧を求め、あるいは旧陣地の焼け残りの食糧や米軍の物資を盗んで自活を図ったが、次々と飢餓やマラリアで斃れていった。ビアク島への補給は、7月上旬に1回実施された空中補給が最後となり、7月19日にビアク島を脱出してマノクワリに帰還した海軍の森機関兵曹ほか若干名を最後としてビアク島と島外との連絡は絶えた。米軍は8月20

日、ビアク島作戦の終結を発表した。

ハ ビアク支隊の最後

米軍によるビアク島の飛行場の使用開始は、モクメル第1が6月22日、同第2が8月1日、同第3が8月12日となり、マリアナ沖海戦に間に合わせる事ができなかった。大東亜戦争後期の島嶼での戦闘で、日本軍が米軍の上陸から1ヵ月以上も飛行場の使用開始を許さなかった事例は、ビアク島のみである。だが、ビアク島の奮戦も空しく、マリアナ沖海戦は、日本軍の完敗に終わった。

ビアク島に投入された米軍の兵力は、約3万名であった。それを1個聯隊強の兵力で1ヵ月以上戦闘を継続したビアク支隊に対しては、昭和天皇から度々御嘉賞があり、寺内寿一南方軍総司令官も感状を授与した。葛目大佐は死後特旨をもって陸軍中将に任ぜられた。米軍もビアク島の日本軍の抵抗をニューギニア作戦中最大と評し、葛目直幸支隊長を「brave and resourceful officer」―勇敢で機略縦横の武人―と評し、また、「a well-directed and stubborn defense」―よき指揮と頑強な防御―と褒めている(米軍戦史)。

ビアク島の日本軍は、その後、米軍の掃討作戦と飢餓によって逐次消耗していった。千田少将は12月25日に戦死

したとみられる。日本軍の将兵は、終戦までに302名が捕虜となり、終戦後、砲兵第2中隊長松山静雄中尉を長とする86名が収容された。日本軍の生還者はこれらを合わせて520名のみであった。米軍も、戦死傷者2799名、戦病者3500名にも上った。

九 慰霊顕彰

大西洋横断飛行の英雄リンドバークが、ビアク島戦線に参加している。彼は『第二次大戦日記』の中で、優勢な米軍に対して驚異的な抵抗を見せた日本軍将兵の戦いぶりを、次のように称賛している。

「仮に攻守ところを変えて、我が方の部隊が、かくも勇敢に立派に拠点を守ったのであれば、この防衛戦は我が国の歴史上、不撓不屈と勇氣と犠牲的精神との最も栄光ある実例の一つとして記録されたに相違ない。」

勇戦の中、少数よく陣地を死守し、勇敢かつ立派に戦って逝かれた先人の尊い犠牲は、我々日本人の記憶の中にしっかりと残していかなければならない。

1 日本政府建立慰霊碑

日本政府は、昭和31年7月、ビアク島南西部・パライ海岸の西洞窟入口に「戦没日本人の碑」を建立した。



ビアク島戦没者慰霊（日本国政府建立）

また、洞窟の近くには、ビアク島戦没者慰霊モニュメントが建てられてお

り、中には幾つかの墓碑が収められ、所縁の方々の献花がなされている。

2 遺骨収容帰還

ビアク島における戦没者遺骨収容帰還事業は、昭和56年に開始され、今日まで15回実施されている。

戦死者約1万1000名の激戦地であったが、現在までに帰還した御遺骨は、4250柱に過ぎず、約6千数百柱が未帰還となっている。

生存者が少なく、また、関係者の高齢化に伴い、収容作業は、益々難しくなることが予測され、国を挙げての短期間集中事業の推進が望まれる。

「神武東征と交聲曲『海道東征』の復活」 奉祝「建国記念の日」に

2月11日は、「建国記念の日」である。今年は、皇紀2675年の節目の



年である。丁度75年前の昭和15年は、皇紀2600年に当たり、国を挙げて我が国の建国、紀元節を奉祝したものである。神武天皇を祀る橿原神宮は、この年を記念して新社殿の造営が行われ、神武東征に関わる諸行事が大々的に催行された。

さて、この日は好天に恵まれ、明治神宮及びその周辺は「建国記念の日」の奉祝ムードに包まれていた。午前中原宿表参道周辺では、首都圏10大学のブラスバンドや子供達の鼓笛隊、各地から参加した勇壮な神輿のパレードが繰り広げられた。ここだけでしか見られない「日の丸神輿」や「復興神輿」

も参加していた。10大学ブラスバンドの奉祝マーチングコンテストの審査も行われ、今年は、東海大学が優勝し、奉祝中央式典で表彰式と演奏披露が行われた。また、八王子の関東小鉄太鼓の皆さんによる勇壮な奉祝太鼓の演奏も披露された。

午後1時から明治神宮記念館で開催された「建国記念の日」奉祝中央式典は、民間団体「日本の建国を祝う会」（会長大原康男國學院大学教授）主催により、来賓の国会議員、30数箇国の外交団を始め一般参列者千数百名が参加して盛大に開催された。若者や女性の参加も多く熱気に溢れていた。

式典は開会の辞に始まり、前会長の小田村四郎元拓殖大学総長に合わせて橿原神宮を遥拝し、国歌斉唱の後、主催者挨拶で大原会長は、この「建国記念の日」こそ、国家成立の根本であり、国を挙げて奉祝すべきであり、政府主催による奉祝行事の実施を強く求めるものである。一昨年来、併せて、2月22日の「竹島の日」、4月28日の「主権回復の日」の制定を求めたところ、4月28日の「主権回復の日」のみは実現したが、隣国韓国に遠慮してか、「竹島の日」も実現せず、政府主催の奉祝「建国記念の日」も未だ実現に至っていない。

本日は、皇紀二千六百七十五年の建国記念の日を迎えて、我々日本人は神武創業のいにしえを偲び、建国の理想と精神に立ち返り、皇室を中心に仰ぐ日本の国体と伝統に対する誇りと自信を喚起しなければならない。

今年は、終戦後70年の節目の年に当たる。また、3年後には、明治150年を迎える。明治維新に際し明治天皇は、万事神武創業の精神に基づき、「八紘為宇」の大理想のもと、五箇条の御誓文を発せられた。世界に類を見ない我が国の歴史と伝統文化を継承し発展させていかなければならない、と力強く決意を述べた。

来賓祝辞、安倍総理のメッセージ披露等の後、政府主催による建国の日奉祝行事の実施等を求める決議を採択した。次いで、全員起立して「紀元節」の奉祝歌を斉唱し、三好達日本会議会長の音頭で高らかに天皇陛下万歳を三唱して第一部の式典を終えた。

次いで第2部の記念講演は、文芸評論家で都留文科大学教授でもある新保祐司氏の「神武東征と交聲曲『海道東征』の復活」と題する講演である。

交聲曲『海道東征』は、昭和15年・皇紀2600年（西暦1940年）奉祝行事の祝典曲として作曲された日本初の交聲曲（オーケストラと声楽）独

唱と合唱が一体となった、いわゆるカントータ）で、日本建国の神話を格調高く描いた名曲である。作曲は「海ゆかば」などの作曲で高名な信時潔で、山田耕柞らと共に日本の洋楽の礎を築いた作曲家である。歌詞は、高名な詩人北原白秋が『古事記』や『日本書記』の記述を基に、作詞したものである。演奏時間50分に及ぶ大曲で、国産みの伝承から神武東征に至るまでを吟唱する8章からなる。

戦後、GHQの占領政策によって、日本の教育内容を「客観的歴史と神話の分離」へと変革させられ、それに同調する津田左右吉博士らの「不合理な記述を含むものは信じられず、歴史を構成する資料としては、認めるべきではない」とする古代史観に洗脳され、日本の建国神話やナショナリズムを極端に避ける動きの中で、封印されてきたこの名曲が、新保祐司氏によって発掘され、蘇ることとなった。その概要は次のとおりである。

第1章 高千穂（たかちほ）

天地創造の場面から始まり、日向の国の高千穂の土地柄のよさが讃えられ、天照大御神の子孫であるカムヤマトイハレヒコ（後の神武天皇）は、「我が国を統治するには、早く東へ向かわなければならぬ」と歌う。

第2章 大和思慕（やまとしほ）

出発前、まだ見ぬ大和の国を憧れうたう。『古事記』からの引用で「大和は国のまほろば」という有名なフレーズで始まる。

第3章 御船出（みふなで）

日が昇り、カムヤマトイハレヒコの顔が朱に染まる。ちょうど満ち潮になり、いよいよ船出。東征が始まる。

第4章 御船謡（みふなうた）

船出にあたり、旅の安全を祈願する。『祝詞』が引用されている。

第5章 速吸と菟狭（はやすいとうさ）

速吸は大分県と愛媛県の間、佐賀関海峡、菟狭は大分県宇佐地方をさす。速吸の海峡での出来事をわらべうた風にうたい、菟狭に上陸した一行が歓待される様子を日本の中世歌謡風にうたう。

第6章 海道回顧（かいどうかいこ）

宇佐にしばらく滞在した後、筑紫の国、安芸の国、吉備の国を経てゆつくりと東を目指す。

第7章 白肩の津上陸（しらかたのつじょうりく）

一行は河内の国、白肩之津に上陸するが、長髓彦（ながすねひこ）の軍勢と戦闘になる。

第8章 天業恢弘（てんぎょうかいこう）

カムヤマトイハレヒコは大和の橿原で即位して初代の天皇となる。三種の

神器への賛歌がうたわれ、日本が建国される情景で結ばれる。

※北原白秋は、この『海道東征』を第1部とし、続く第2部、第3部を信時潔と作る希望を持っていたが、果たさずに終わった。

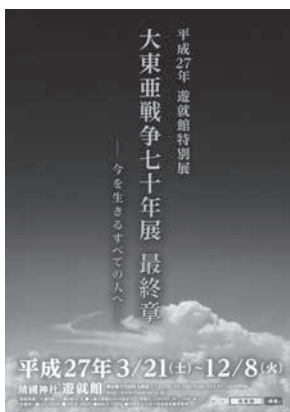
信時潔没後50年となる今年、11月20日（金）、信時の故郷・大阪、ザ・シンフォニーホールで、戦後初の交聲曲『海道東征』全曲が演奏される。管弦楽は大阪フィルハーモニー交響楽団、指揮は北原幸男、合唱は大阪フィルハーモニー合唱団（ソプラノ幸田浩子・大田尚見、アルト山田愛子、テノール中鉢聡、バリトン田中純）と大阪すみよし少年少女合唱団である。

そして、講演の最後に、新保氏の解説による『海道東征』の演奏録音の一部（第1章高千穂と第8章天業恢弘）が披露されたが、誠に格調高い演奏であり、特に第8章天業恢弘は莊重、優雅にして歓喜溢れる感動的な曲趣であって、歳末によく演奏されるベートベンの第九に勝るとも劣らない曲趣に、大いなる感銘を受けた。日本固有の、しかも日本建国の大業を歌い上げたこの曲こそ、第九に替えて、国民こそって合唱するに相応しい曲であると同氏は強調された。同感である。

（飯田 正能記）

平成27年靖國神社遊就館特別展 大東亜戦争七十年展

最終章
—今を生きるすべての人へ—



御挨拶 (徳川康久靖國神社宮司)

この度の靖國神社遊就館特別展では、平成24年から3年に亘り開催してきた「大東亜戦争七十年展」の最終章として、昭和19年の本土防衛作戦から終戦に至るまでの関係史資料を展示しております。

本土空襲が激化して行く昭和19年、迎撃機或いは高射砲での「防空戦」は、翌年にかけて熾烈な戦いとなります。そしてこの年の10月には「特攻作戦」が始まり、終戦まで1年足らずのうちに4300人以上の方々が雄々しくも散華されました。

マリアナでの攻防を制した米軍は、

昭和20年2月には航空作戦の要地であった「硫黄島」に侵攻しましたが、栗林中将率いる守備隊は1ヵ月もの奮戦の末に玉砕。一方、「沖縄」では陸海空から特攻が繰り広げられ、地上戦では多くの県民が守備隊の第32軍と共に敢闘しました。海軍司令官であった大田實中将は、決別電報で「沖縄県民斯く戦へり県民に対し後世特別の御高配を賜らんことを」とその大きな功績を伝えていきます。

昭和20年8月15日、陸海軍は、昭和天皇の玉音放送をもって矛を収めましたが、「南樺太」と「占守島」では日ソ中立条約を一方的に破棄して攻め込んだきたソ連軍との攻防が続きます。樺太では真岡郵便電信局「九人の乙女」の悲劇をはじめ、各地で守備隊と多くの住民が犠牲となりました。同じ頃、千島最北端の占守島では戦車を含む守備隊が死闘を繰り広げて優勢な戦況でしたが、8月21日、方面軍からの停戦、武装解除の命令をもって防衛戦を終えたのです。

先の「大東亜戦争」は、我が国の自存自衛と人種平等による国際秩序の構築を目指すことを目的とした戦いでありました。ひたすら祖国を護るという一年を以って戦場へと赴いた先人達に至誠は、ひとえに愛する家族や後に生

きる私たち子孫のために奮起した尊い御事跡であります。最終章となったこの特別展を是非御覧戴き、今日の平和の礎を築いてくださった英霊への感謝と共に、その「みこころ」を感得して戴ければと存じます。(以上)

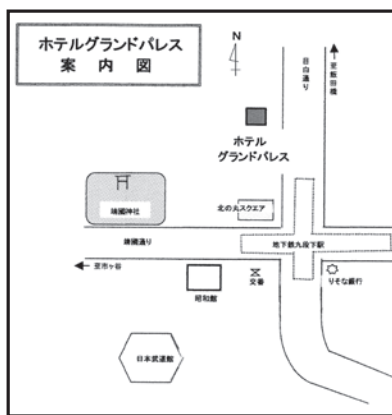
【開催場所】靖國神社 遊就館1階・特別展示室

【開催期間】平成27年3月21日(土)～12月8日(火)

【開館時間】午前9時～午後4時30分
(入館は閉館の30分前まで)

【休館日】6月24日(水)・26日(金)
【拝観料】大人300円

大学生200円・高校生100円
中学生以下及び常設展拝観者無料



事務局からの報告等

一 理事会・評議員会の開催

3月2日(月)、平成26年度第2回通常理事会が、当協議会会議室において開催された。

会議においては、事務局からの提出議題について、熱心な討議が行われ、いずれも事務局案が、原案どおり承認された。

1 議案

- ① 平成27年度事業計画書及び同収支予算書
- ② 平成26年度臨時評議員会の開催
- ③ 平成26年度下半期業務執行状況

2 出席者
理事11名中9名、及び監事1名が出席した。

また、3月17日(火)、平成26年度臨時評議員会が、靖国会館九段の間に於いて開催され、平成27年度事業計画書及び同収支予算書が報告され、異議なく了承された。なお、出席者は、評議員11名中10名であった。

二 慰霊祭等への参加状況

- 1 平成27年3月12日、千島ヶ淵戦没者墓苑において、硫黄島戦没者遺骨帰還団の遺骨引渡式が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

2 平成27年2月22日、財団法人青葉園において、NPO法人国民保護協力会主催による山下奉文大将閣下慰霊祭が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

3 平成26年3月7日、靖國神社において、NPO法人JYMA日本青年遺骨収集団主催による戦没者慰霊祭が執り行われ、当協議会から岩田司朗常務理事が参列した。

4 平成27年3月28日、靖國神社において、(公財)特攻隊戦没者慰霊顕彰会主催による第37回特攻隊合同慰霊祭が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

三 硫黄島遺骨帰還通常派遣事業への参画

平成26年度第11回派遣が平成27年1月16日から同月30日まで、第12回派遣が1月30日から2月13日まで、及び第14回派遣が2月25日から3月11日の間実施され、当協議会からの派遣団員として、隊友会4名、偕行社1名、水交会1名の計6名が参加し、御遺骨の収容に献身されました。

収容作業は前回同様、気温摂氏60度以上、高温多湿の狭い洞窟内で行われ、体力の消耗が著しく、大変御苦労されました。お疲れ様でした。

なお、平成27年度事業は、昨年度と同規模の派遣が実施される予定です。

派遣を希望される方は、それぞれの会員となっている法人又は当協議会へ直接お申し出の上、派遣候補者として登録されるようお願いいたします。

新入会員名簿 (敬称略)

(平成26年12月1日～平成27年2月28日)

【賛助会員】 (五十音順)

市田 信行 小林 昇
澤木 孝明 米村 義一

高額寄附者御芳名

鶴田 富江 様 (故人)

御芳志誠に有り難うございました。

会費納入のお願い

平成27年度の年会費納入にご協力をお願い申し上げます。

なお、本会報同封の払込取扱票は、賛助会員年会費納入並びに平成27年度合同慰霊祭参加申込み及び参加費納入を兼ねておりますので、ご確認の上、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

ご寄稿についてのごお願い

当協議会では、広報誌『慰霊』を、年4回(一月、四月、七月、十月)発行しています。各団体及び会員の皆様の積極的なご寄稿をお願い申し上げます。

ご寄稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。

2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協議会事務局に任せ願います。

3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当協議会事務局宛としてください。

記

〒102-0073

東京都千代田区九段北3-1-1

靖國神社遊就館内・地階

(公財)大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会事務局

電話 03-6380-8943

FAX 03-6380-8952

当協議会会員ご入会のご案内

当協議会におきましては、戦没者慰霊事業の永続を図るため、多くの方々の当協議会会員ご加入をお待ちしております。

会員の区分と年会費は次のとおりです。

一 賛助会員

(本会の趣旨に賛同する個人)

年会費 三〇〇〇円

二 賛助特別会員

(特別ご芳志の賛助会員)

年会費 五〇〇〇円

三 正会員

(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)

年会費 一〇〇〇〇円

四 特別会員

(本会の趣旨に賛同する法人・団体)

年会費 一口一〇〇〇〇円

(一口以上)

